

確かな学びを支える国語科学習の授業と評価

栗田 稔生 島末 智成

はじめに

昨年度より、本校では「学ぶ力」「学んだことを生かす力」「学びを支える力」をどのように高めていくことができるか、また、高めていく上で、指導者として共有すべきことには、どのようなものがあるのかを明らかにしていくことが研究の課題となっている。これら3つの力は、国語科の学習にも深く関わると考えられる。

そこで、学校の研究テーマを受けて、国語科の研究テーマを「確かな学びを支える国語科学習の授業と評価」として、本年度は、国語科の学習からみた「学びを支える力」とはどのようなものなのかについて研究していくとともに、「学ぶ力」を育むための授業と評価について研究していきたいと考えた。

1 国語科の本質と「学ぶ力」

本校国語科では、「今ある自分そのものを大切にしながら、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』などの言葉を大切に活動を通して、他者と関わり、表現したり、取り入れたりすることによって、さらに自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこうとするとともに、人間関係をも豊かにしていこうとする」ことを国語科の本質として「表現愛」と定義している。

つまり、言葉を使った「話す」「聞く」「書く」「読む」活動や学習を積み重ねていくことと、自分の生活の様々な経験や思いを言葉を使って感じて、自分の思いを豊かにしていったり、言葉を用いた自他のコミュニケーションを図っていきったりするという言語生活を豊かにしていくこと、つまり、「表現愛」を豊かにしていくことが、「国語科の学ぶ力」を育てていくということになる。

2 国語科からみた「学びを支える力」

低学年生活科の学習を例に挙げて考えてみる。生活科の学習の中で、生き物の観察の単元がある。その学習では、必ず自分の思いを記すためのワークシートを使う。例えば、「秋を見つけに行こう」という学習をした際に、子どもたちは、見つけた秋をワークシートに記すことになる。

仮に「木の葉が夕日のように赤くなってきました。」と書いた子がいるとする。この文章の中で、木の葉を夕日にたとえた表現が使われている。物語の美しい表現を読んだり、季節感を言葉で表したような記述を読んだりするなどの言語生活が豊かであることの現れである。

自分の生活の様々な経験や思いを言葉を使って感じていくことを体験していくことが、

他教科の学習場面で行われてる「書く」活動でも発揮されている例になっている。

また、「話す」「聞く」活動でも、「みんなのほうを向いて話をする」ことや、「話を聞くときには、話をしている人のほうを向き、話の途中に口を挟まない」、「伝えたい相手に伝わる声量で話す」などは、どの学習でも行われることであって、6年間を通して、大切にしていかななくてはならない「学びを支える力」である。

このように、「学びを支える力」を子どもたちの学校生活を支える生活面や学習面での基盤ととらえると、他教科の学習の中で、必ず用いられる「話す」「聞く」「読む」「書く」活動を学習していく国語科の「学ぶ力」と「学びを支える力」は、深く関わっている。だからこそ、国語科の学習はより充実させていく必要がある。

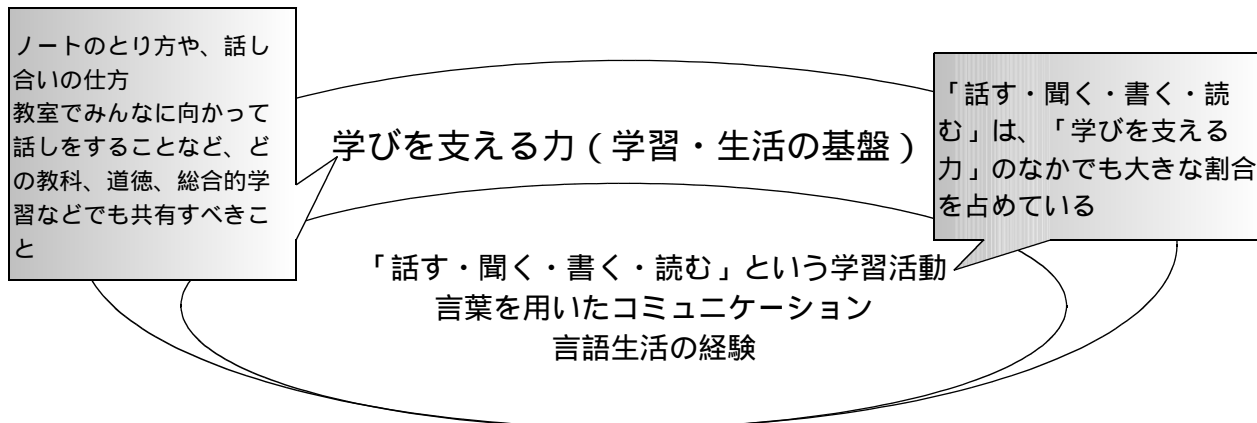


図 2 - 1 「学びを支える力」の中で、国語科が支えている部分

3 国語科の本質を高めるための活動

国語科の学習を充実していくことで、国語科の学習からみた「学びを支える力」や「学ぶ力」は育てていくことができる。

今年度は、国語科の学習を充実させる上で、指導者として留意すべき項目を2つ考えている。1つめは、日常行われているような「言葉を使った話す・聞く・書く・読む活動」を国語の学習としてとらえなおし、国語科の学習に生かしていくこと。2つめは、国語科の学習の中に、子ども達同士の学び合いを取り入れていくことである。これらのことに留意していくことで、より国語の授業時間が充実していくことになると考えている。

(1) 日常行われている言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』活動を国語の学習としてとらえなおす。

「話すこと・聞くこと」の活動として

表現愛の中には、「他者と関わり、人間関係をも豊かにしていこうとする」がある。生活するなかでは、他者とコミュニケーションをとっていく必要がある。このコミュニケーションの中で、相手を意識した言葉遣いなどを感じていく。また、相手の思いを知ること、自分の思いも再認識できる。このような意識を指導者としてもっておくことで、様々な学習において行われる「交流」の活動を国語科の学習としてとらえなおすことができる。

そうすることで、国語科の「話すこと・聞くこと」の活動としての評価をすることができ、結果として「話すこと・聞くこと」の力を様々な学習場面において育てていることになる。

国語科の学習として時間割に設定されていない日々の活動を「話すこと・聞くこと」の活動として評価していくための例として、以下に「話すこと・聞くこと」の目標と日々の活動の例を載せてみた。「書くこと」「読むこと」も同じように考えていくようにする。

例えば、朝の会などに継続して取り組まれるスピーチタイムなどを、自分の経験や思いを交流しあう「話すこと・聞くこと」の実践を考えてみると、以下のようにとらえ直していく必要がある。

低学年	話す...相手にわかるように話すことができる。 聞く...大事なことを落とさないように聞くことができる。
中学年	話す...自分の考えがわかるように、筋道を立てて、相手や目的に応じて適切な言葉遣いで話すことができる。 聞く...話の中心に気をつけて聞くことができる。
高学年	話す...考えたことや自分の意図が分かるように話の組み立てを工夫しながら、目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すことができる。 聞く...話し手の意図を考えながら聞くことができる。

指導者として上記のような評価規準をもっておくと、学年によってスピーチタイムも変わってくる。例えば、低学年では以下のような活動になると考えられる。

<p>日々の活動 実践事例...朝の会のスピーチタイム（低学年）</p> <p>話す人...相手を見て教室の後ろの人に伝わる声量で話をする。 関連した話題で5つの程度のお話をする。</p> <p>聞く人...話し手の話題につなげる、ひろげる質問をする。</p>

話す人の声量だけを取り上げると、以上のように、低学年では、とにかく、クラスみんなに聞こえるようにお話をすることによって重点を置いて指導していくようになるだろう。この段階を経て、中学年では、伝えたい相手を意識した声量で話すことに重点が移っていくし、高学年では、伝えたい相手だけではなく、伝えるべき内容や目的によって声量を変えて話すということによって重点が移っていくのである。

「書くこと」の活動として

本校では、全学年、毎日、日記を書くという家庭学習がある。特別な理由がない限り毎日書くことになるので、日々「書くこと」の活動を継続していることになる。また、この日記を書くことは、「自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこう」とする活動である。この活動も、指導者として、「家庭での宿題」という意識から、「書くこと」の活動をしているという意識に変えていく必要がある。そうすることによって、日々の日記の記述を読むときにも、国語科の「書くこと」の作文を読んでいるという意識になり、「書くこと」の活動を指導していることになるのである。

低学年	自分の思いを順序よく書くことができる。
中学年	自分の立場をはっきりさせて書くことができる。
高学年	筋道立てて書くことができる。

上記のような評価規準をもって、日記を捉え直してみると、高学年では、以下のようなことを指導者として意識した活動になる。

<p>日々の活動 実践事例...日記（全学年共通） 指導者として意識しておくこと 毎日、コメントを書いて、その日のうちに返却すること。 朝の会や国語の時間などに日記を紹介する。（掲示・指導者が読む） （高学年） 抽象的な題名でも文章を書くことができる。 自分を客観的に見たり、多様な価値観を持ったりしている記述を認めていく。 友だちや、保護者、社会に対して矛盾点などを突いた意見が書けるようになるので その意見に対する、一般論程度ではなく、率直なコメントをする。</p>
--

この活動例の中で、日記に対するコメントを例に挙げてみると、低学年では、自分の思いを時系列の順番や登場人物の順番で書いておき、それに対しての思いを書くことを勧めるようなコメントになるし、中学年では、時系列の順番に加えて、自分の思いや自分の考えを、さらに明確にしていく記述を書くように勧めていこう。また、高学年では、自分自身を見つめ直してみるような書き方にしようと勧めるコメントを書くことも考えられる。

「読むこと」の活動として

声に出して言葉を読むことは、全ての学習の基本である。文字が読めない2歳くらいの子どもでも、声を出して大人顔負けのおしゃべりをすることもある。それほど、音声言語は大切なものである。

言葉を声を出す活動は、声を出すことに慣れるだけではなく、文章の切れ目や、段落、登場人物の気持ちや様子などを感じながら読めることにつながり、結果として読み取りも深まっていくと考えられる。例えば、朝の音読タイムを「読むこと」の活動として、とらえ直すことによって、毎日、継続して以下のような評価ができることになる。朝の音読タイムが、国語の授業での「文章を読み取っていく」活動につながっていく効果も期待できる。

低学年	場面の様子などについて、想像を広げながら読むことができる。
中学年	場面の移り変わりや情景を叙述をもとに想像しながら読むことができる。
高学年	登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むことができる。

日々の活動 実践事例...詩の音読タイム（低学年）

読み慣れるため、一週間同じ詩を読み、翌週には変える。

一斉読み、個人読み、グループ読みなどの形態を増やす。

個人で読む機会を設定し、個人の評価を行う。国語の評価に生かす。

この詩の音読を低学年、中学年、高学年で「読む詩」と「読み方」という観点で捉え直してみると以下ようになる。

	読む詩	読み方の例
低	リズムよく読める詩 読んでいて楽しくなる詩 漢詩	一人で読む グループで読む みんなで読む
中	季節にあわせた詩 イメージで統一された詩 漢詩	役割を決めて読む 群読をする 最終連から読んでみる
高	抽象的表現が含まれる詩 古文 自分で選ぶ詩 漢詩	詩の題名を想像しながら読む 言葉を隠して、言葉を想像しながら読む 群読をする 暗唱を目標にして読む

（２）国語科の学習の中に、子どもの学び合いを取り入れていくこと

昨年度の成果から、指導者は、「この単元では、この力を育てよう」と意識して学習を計画し、ねらいをしぼった学習をしていくことによって、子どもたちの「話す」「聞く」「書く」「読む」活動が高まっていくことがわかった。

また、子どもたちの学習を評価すると、どうしても、課題を比較的楽に解決していく子と、課題に対してつまづく子の姿が見えてくる。どちらの子に対しても、指導者として、充実できる学習を保障していくという課題も明らかになった。

そこで、今年度は、昨年度の成果をふまえて、より子ども達の学習を深めていくために

も、学習の中で「交流」や「少人数での学習形態」を積極的に取り入れていきたいと考えている。これらの「交流」や「少人数の学習形態」は、子ども達同士の「学び合い」による学習を目指していくことととらえている。

具体的には、単元の学習内容や子どもたちの学習状況に合わせて学習形態を工夫することが考えられる。つまり、目的別のグループや、指導者の評価をもとにしたグループなどを用いて学習を進めていく学習形態にしていくことである。



図 2 - 2 学び合い学習

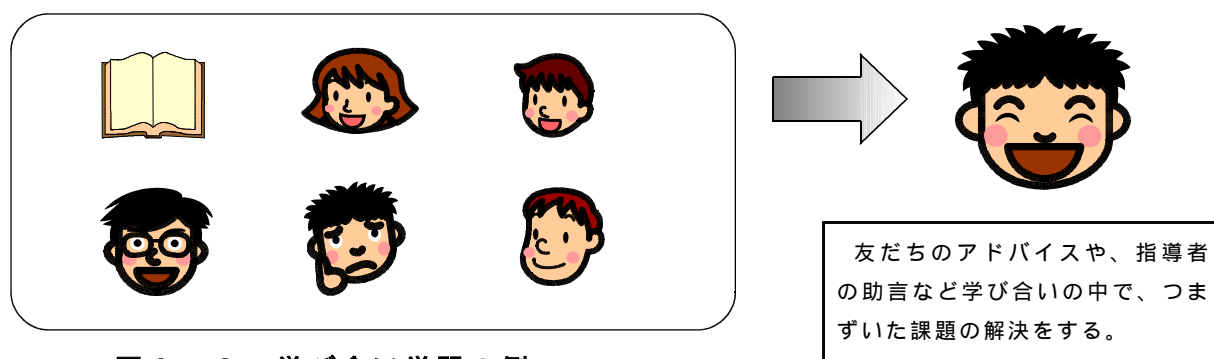


図 2 - 3 学び合い学習の例

4 授業の充実を目指した実践具体例

日常行われているような「言葉を使った話す・聞く・書く・読む活動」を国語の学習としてとらえなおしていくことと、国語科の学習の中に、子ども達同士の学び合いを取り入れていくことによって国語科の授業を充実していくことを目指した。そのような授業とはいったいどのようなものなのか、実践をまとめてみる。

(1) 日々の学習や活動、経験の積み重ねを国語科の学習に生かしていく授業例

日々の学習や活動、経験の積み重ねの上に、ねらいをしぼった学習をしていくことで、日々の活動を国語の学習に生かしていくことの例を、2年生で教科書教材「まど」を学習で考えてみる。

この単元は、「音読」を中心とする単元と設定した。4月ということもあり、とにかく声に出して言葉を読むことにこだわって学習を進めていくこととした。

そこで、学習の初めには、必ず、一人一文読む時間をとった。この一文読みの際に、評

価を行う。2年生になって初めてということなので、満足できる音読をしている子どもは少なく、ほとんどの子が、つまったり、間違えてしまう。そこで、間違えてしまう子に対しては、指導者の後に続いて読むようにしたり、声が小さくなってしまふ子には、友だちと同じくらいの声を出そうと言葉がけをしたりしながら音読を進めていくことにした。似たような評価と支援を毎時間繰り返すことになる。

また、音読を中心とする単元と設定したので、ワークシートを用いたり、ノートに記述するなどの詳細な読み取りはしなかった。学校での場面、ボールを見つける場面、家の中でお母さんと会話する場面の3つの場面の場面の様子の読み取りに関しては、簡単に触れる程度の指導しか行っていない。

気持ちを想像することに関しては、主に、会話文の読み方と関わらせて想像することにした。教材に『つまらなそうなおかあをして言いました。』と記述してあれば、「つまらなそうなお読み方ってどうやるのかな？」と読み方を考えて読んでいったし、『大声でさげました』と記述してあれば、大声をだすようにしていった。

また、ボールを見つけた場面のように、教材に気持ちを表す記述がなくても、きつねの気持ちが想像できるような場面では、きつねの驚きや喜びをあらわすような読み方を考えていくようにした。ほぼ、音読と関わって読み取っていったので詳細な評価を行わなかった。読み取りの評価としては不足しているが、ねらいをしぼった学習をしていくことによって、子どもたちの「読む」活動が高まっていくと考えた。

低学年の満足できる読む姿「語や文としてのまとまりや内容、響きなどについて考えながら声に出して読むことができる。」をもとに、日々の詩の音読の学習を、国語の学習に生かしていく実践になったと考えている。

(2) 学び合い学習を取り入れた授業例

少人数のグループを構成する「学び合い」を取り入れた実践例

4年生6月の説明文教材「ヤドカリとイソギンチャク」の単元で、「読みとり」の学習から「文章構成図の作り方」につないでいく学習を設定し、その過程の中で、この学び合いを大切にしたい。

具体的には、教科書教材「ヤドカリとイソギンチャク」を全員で読み取り、文章構成図をまとめた後、他の教材を用いて、再度、文章構成図を書いていく活動をした。その他の教材の文章構成図を書くことで学習内容の深まりをねらっている。

その際に、能力別のメンバー構成をするのではなく、あくまでも自分自身をふり返って教材を選択することと、四人グループの中での学び合いを大切にすることにしたい。

この学び合いの中で、子どもたちは、「文章構成図を見つけるコツ」を考えていくことができた。例えば、「はじめ」と「おわり」を先に見つけるということや「なか」がいくつに分かれているのか考えること、問いー実験・観察 答えの関係をみつけること、文の初めの言葉に気を付けることなどを考え出している。

中学年の子どもたちは、自分や友だちの考えの良さを客観的にとらえたり、自分の考えと友だちの考えとの相違点や共通点を見いだしたりすることができるようになってくるからこそ、この時期には、単元の中で自分の考えをしっかりと見つめ、自分と友だちの考えや思いを交流する場面を大切にしないといけない。この4年生の実践は、学び合い

を学習の中に取り入れていったことが、説明文の読み取りや文章構成図を見つけるコツを学習していくことに効果があった例である。

この学習は、学習形態の工夫により、子どもたちどうしの学び合いを大切にしていこうという考え方を基本にして進めていった。

定着をめざした学習については、指導者が、違う課題を与えて、課題解決に導くことはしなかった。また、発展的な学習についても、課題を与えて、より難しい課題解決をめざしていくことはしなかった。あくまで、子どもたち自身の考えを大切にしていこうとした。

自分自身で課題を解決しなおしたいと考えている子も学び合いの中で課題を解決していくことをめざすし、課題を解決してしまった子も、学び合いの中で、もっと自分らしくより豊かな表現をめざしていこうという考え方である。

どちらも、指導者からの言葉がけや友だちからのアドバイス、また、よりよい表現に触れることなどをしていきたい。指導者として、子どもたちの学習をぶつ切りに評価して、能力別に分けてしまうことのないように気をつけていきたいと考えた。

情報機器を活用した「学び合い」を取り入れた実践例

また、2年生10月の物語教材では、自分の音読と友だちの音読をパソコンを使って比べてみるという活動を取り入れた。パソコン上に保存された音読のデータを見ることによって、お互いの音読を高め合っていこうという意図で取り入れた。

その学習の中で、A児は、B児の姿をビデオで見ながら、「表情」「リズム感」「動作」について気づいていた。その横に座っていた別のC児は、A児の姿から「読み方」を学んでいた。このように、お互いの姿を比べてみるだけでも、自然と学び合いが行われる。その学び合いを生かして、指導者が、しっかりと交流させることによって、さらに学び合いが深まっていくと考えられる。

また、この学び合いは、自分と友だちを比べることで、友だちの読みを評価し、自分の課題を達成していくことにもつながっていると思われる。

今年度は、以上のように、日常行われているような「言葉を使った話す・聞く・書く・読む活動」を国語の学習としてとらえなおし、国語科の学習に生かしていくこと、つまり国語科から見た「学びを支える力」に関わった「学ぶ力」を育てていくことを考えた授業を構成するようになってきた。また、子ども達同士の学び合いを取り入れていくことを考えながら実践、研究を重ねてきた。

このような授業を積み重ねていくことによって、「今ある自分そのものを大切にしながら、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』などの言葉を大切に活動を通して、他者と関わり、表現したり、取り入れたりすることによって、さらに自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこうとする」とともに、人間関係をも豊かにしていこうとする」子、つまり表現愛を発揮している子が育まれることになると考えている。